

会誌編集委員会

女子部

Number
9

当たり前のこと

芝浦工業大学 野田 夏子

高橋は、寒風に身を縮めながら夜道を自宅へと急いだ。暦の上では春とは言え、今夜の風はまだ冷たい。かおるはもう家に着いた頃かな、とふと思う。かおるか、薫か、別の字か、まだ書き方さえ聞いていなかった。

さて、上記の「高橋」と「かおる」、皆様は男性・女性のどちらだと思われますか。高橋は男性、かおるは女性と思われた方が多いのではないだろうか。

ここには性別を直接示す表現は何もない。「高橋」は姓であろうから、これだけでは男性か女性か分からない。「かおる」は下の名前だろうが、男性にも女性にもある名前だ。しかもどういう字か分からないというから、さらに男女の判別は難しい。地の文に紛れて、科白（あるいは心の中での科白）と思われる、家に着いた頃かな、という表現が出てくるが、これも男性が言っても女性が言ってもおかしくない。しかも半分地の文のようにになっているから、直接の話し言葉よりも中性的な表現になっているとも考えられる。

しかし、である。高橋は男性、かおるは女性、という意見が多いのではないだろうか。私も冒頭の文を読んだら、そう感じる。いつだったか、ふと気になり始めたのだ。日本の小説では、男性の名前は姓で表され、女性の名前は下の名で表されることが多いのではないかと（もっともケータイ小説などのごく最近の作品については知らない）。も

しも日本文学専攻だったら「小説に見る男女の名前表現について」というテーマで研究できるかも、などとも思った。

なぜ男性を姓で、女性を名で表すのか。最近になって思い至ったことがある。日本では姓を使うのは職場など社会的な活動の場であり、名を使うのは家族や親しい友人の間が多い。過去の日本においては、社会的な活動をするのは男性であり女性は家にいるものと思われてきたから、そこで姓を書けば男性のこと、となったのではないだろうか。そして私自身も含め多くの人が、それをごく当たり前のこととして受け入れている。しかし、姓で示せば男性で、名で示せば女性、というのは実は当たり前とも言いがたい。昨今、男女平等であるのは当たり前、自分も男女を平等に公平に扱っている、という人が多いと思う。しかし、当たり前と思っていることの中にも、実は男女不平等の根っこが潜んではいないか。

ところで、「小説に見る男女の名前表現について」というテーマを思い付いた昔、でも多くの小説から名前表現を抜き出し性別と対応付けるのは大変だから無理そう、と思った。しかし最近の情報技術は膨大なデータの収集と分析はお手の物。もしかしてすでに日本文学とITの融合により研究されているだろうか。何かで存知の方はご一報ください。

昔読んだ本、特に小説を、ある程度の年月が経った後に再び読んだとき、そこから受ける印象があまりに大きく変わっていて衝撃を受けることがあります。書かれている文章はまったく同じなので、受けた印象に対する記憶が時とともに変わっていくこと、そして読む側の私自身が変わっていることが理由なのでしょう。それにしても、自分では確かな記憶だと思っているものが、実は相当に曖昧なものであることを突きつけられるのは、なかなかショックなものです。まあ、記憶は上書きされるとか、記憶の錯覚というのは、心理学では古くから知られた現象のようですが...

ここでは1つの例として、スタンダードの「赤と黒」を取り上げたいと思います。これは、私の最も好きな本のうちの1つで、中学生のときに初めて読み、大学生のときに再読し、就職してしばらくしてから再び読み、そして数年前にもう一度読んだ本です。家庭教師先の市長の奥さんや貴族令嬢との複雑な恋愛感情の描写などが多く、中学生が気に入って読んでいたこと自体、我ながら理解に苦しみますが、たぶん、学校の推薦図書にならないような本が当時のお気に入りだったのでしょう。翻訳でしたが、文章がすばらしく、風景描写を含め、現実からかけ離れた絵物語の世界に没入できるところが魅力でした。その後、2回目、3回目に読んだ印象は、中学生のときに理解できなかった

細かい心理描写や歴史的背景などを再認識したという程度で、根本の印象はそれほど変わりませんでした。それが数年前に再読したときには、同じ本とは思えないほど印象が異なり大きな衝撃を受けました。それまでほとんど感じなかった、物語としてのリアル感がつきまとい、絵物語から現実の世界に突然連れ戻されたような違和感を覚えたのです。イメージを自由に膨らませて自分好みの風景を作り上げていたかつての私が、年齢を重ね、日々の仕事に追われるうちに、現実的なものの見方をするようになったということもあると思うのですが、印象の記憶は時とともに変容して上書きされ、意味記憶として定着していったのではないかということを強く感じました。ある場所を久しぶりに再訪したときなども、同じような感じを受けることがあります。

会誌1月号の特集「人類とICTの未来：シンギュラリティまで30年？」を読んだとき、このように曖昧で多分に主観的な「記憶」や「意識」というものを、汎用人工知能はどのように扱っていくのだろうかと考えました。私たちは記憶を変容させることや忘れることで心の平安を保っている部分があります。人間らしいコンピュータは、案外、物忘れしたり、言っていることが変わってしまったりするコンピュータなのかもしれません。

Newsstand で購読ができるようになりました！

会誌「情報処理」と「デジタルプラクティス」が Apple Newsstand で購読ができるようになりました！
Newsstand は iPad, iPhone, iPod Touch などの iOS にプリインストールされている本棚です。

会誌

- 月単位の購入が可能です。
- 購入前に立ち読みができますので、ぜひいちどおためしください。
- 年間購読で 12,400 円（1 冊あたり約 1,000 円）でお得です。
1 カ月：1,700 円 / 6 カ月：9,400 円 / 1 年：12,400 円

DP

- 「デジタルプラクティス」は会員・非会員を問わず、どなたでも 無料 でお読みいただけます。
- DP アプリを一度ダウンロードすれば、最新号が自動で送られてきます。

学会誌
日本初！



アプリのダウンロードはこちら（無料）

会誌「情報処理」



<https://itunes.apple.com/us/app/yue-kan-qing-bao-chu-li-qing/id910830137?l=ja&ls=1&mt=8>

デジタルプラクティス



<https://itunes.apple.com/jp/app/qing-bao-chu-li-xue-huidejitarupurakutisu/id923233022?mt=8>